

令和元年9月5日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03338

研究課題名(和文) 哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究

研究課題名(英文) A Study on the Promotion of Gender Equality and Support for Early Career Researchers in Philosophy from Theoretical and Practical Standpoints

研究代表者

和泉 ちえ (IZUMI, CHIYE)

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：70301091

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本哲学会男女共同参画・若手研究者支援ワーキンググループが中心となり、哲学分野における男女共同参画推進と若手研究者支援に関する理論的考察を深化させると共に、大規模アンケート調査を複数回実施することによって得られた根拠事実の精査・公表を踏まえ、学術としての哲学が健全に継承されるために必要なジェンダー平等推進と若手研究者育成を支える基盤を理論・調査・実践の三方向から構築した。また日本哲学会大会におけるワークショップの継続的展開、北海道哲学会、東北哲学会、関西哲学会、西日本哲学会、科学哲学会との共催ワークショップの初の開催、さらに英国哲学会との協力関係の構築等々を通して議論の場を拡充した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

男女共同参画推進と若手研究者支援を巡る諸問題を哲学的知見から学術的に基礎付けると共に、大規模アンケート調査を複数回実施し、そのデータ分析に基づく事実認識を広く共有するための実践的諸活動を内外の関連諸学会との協力体制を構築しつつ幅広く展開しえたことは、本邦の哲学領域における研究教育の健全なる発展にとって有益であったと思われる。また本研究活動が一つの契機となり、人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会(通称「GEAHSS:ギース」)が正式に発足したことも、人文社会科学に内在する固有の諸問題を解決するための連携体制への貢献という意味において、本研究の重要な成果の一つといえるだろう。

研究成果の概要(英文)：Even though the percentage has increased in recent years, women still comprise only about ten percent of the over 1400 members of the Philosophical Association of Japan; this demonstrates that certain factors obstruct women's participation in philosophy as an academic discipline. We have been actively tackling various issues related to both gender-equality promotion and support for early career researchers. We administered questionnaire on these issues. Based on the new survey's results, we held discussions from a variety of perspectives to share "facts". We invited Dr. Joe Morrison, the director of British Philosophical Association, and learnt the "Good Practice Scheme" which has a considerable equality-related intellectual background in UK. We organised a number of workshops with British Philosophical Association, Tohoku Philosophical Association, Nishinohon Philosophical Association, Science Philosophy Association, Hokkaido Philosophical Association and Hiroshima University etc.

研究分野：哲学

キーワード：哲学 男女共同参画 若手研究者育成 ジェンダー平等 理論的研究 実践的研究

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

哲学思想分野における男女不平等問題：いくつかの分野を除き、日本の学術における研究者数の男女不均等は、男女共同参画社会にとって大きな問題である。人文科学においては、女性研究者の割合が 35%を超える分野が多いが、哲学分野は 20%を切り、理系の平均をも下回る状況であり(日本統計 2014)、哲学そのものに付随するジェンダー・バイアスを多角的に再検討する必要がある。さらに女性研究者が抱える諸課題に関して哲学的視点から議論を展開し、学問の健全なあり方を共に考究する姿勢が特に哲学界に求められている。

日本哲学会の男女共同参画への活動：この問題に取り組むべく、日本哲学会は 2005 年に「男女共同参画推進に関する WG」を立ち上げて、全会員に対して男女共同参画に関するアンケートを実施した。このアンケートから、哲学という学問そのものに女性への偏見が潜在的に付随することが浮き彫りになり、教育・研究環境の中で女性が不利な立場に立たされている現実に対して学会として認識を共有し、解決策を模索するための基盤が整備された(日本哲学会 HP 参照)。また女性研究者の抱える問題は、出産・育児支援の不足、ロールモデルの少なさ、人文社会科学におけるポストの減少、大学外でのキャリアパスの選択肢の欠如などとも関連していることが明らかになった。調査結果を受け、日本哲学会は 2012 年に新たに「男女共同参画・若手研究者支援 WG」を設立した。「若手研究者支援」を加えたのは、男女不平等が就業問題と関係していることが判明したからである。公正さの観点から男女平等を学術的に基礎づけ、性別に関わりなく見通しのきく、選択肢豊かなキャリアパスを提示することが哲学の使命であり、また優秀な研究者の輩出を可能にすると思われる。

男女共同参画と若手研究者支援の融合：若手女性研究者を支援するための方策は、近年深刻になっているいわゆるポスト問題とも繋がってくる(国公労調査時報 2010)。2006 年以降、ポスト問題を認識した文部科学省は「キャリアパス多様化事業」を開始し、2008 年には日本学術会議が若手人材育成問題検討分科会の報告を行っているが、このどちらもが自然科学系を主な対象としている。同様の取り組みは人文社会科学の領域においても積極的に展開される必要がある。このために本 WG は、2012 年に日本学術会議で人文社会科学系における男女共同参画学協会連絡会設立の呼びかけを行い、設立準備会を築ききっかけを作り、学協会連絡会発足のための諸活動に積極的に取り組んでいる。

また同時に、女性だけでなく、若手男性研究者にも多様なキャリアパスが提示されねばならない。人文科学に対するニーズが変化中、哲学思想を基盤に据える本質的に豊かな教育的資源を社会に還元するための各種方策および諸実践の展望を新たに構築しなければならない。哲学思想の再定義とその意義の再編成、それを大学などで教育するための方法についても開発する必要がある。また、研究業績を国際化し、国際的な研究教育職のポスト開拓もなされる必要がある。

これらの認識に立って、本学会 WG は、2013 年に「哲学とミソジニー」と題したワークショップ(以下、WS)を開き、戒能民江氏(お茶の水女子大学名誉教授)を提題者に迎えた。哲学そのものに内在するミソジニー(女性嫌い)を問い、女性が哲学研究に従事することの困難さを提起した本 WS は本邦の哲学界において画期的な試みであり、大きな反響を呼んだ。

また 2013 年には、若手・非-常勤職研究者の受ける教育、研究環境、就業、労働に関するアンケート、さらに「哲学思想系学部・修士・博士課程男女構成比アンケート」を行った。2014 年の若手・非-常勤職研究者支援のための WS でこれらの調査結果を発表し、若手研究者の就職や研究継続に関する困難やキャリア継続の問題について検討し、今後の提言につなげることができた。

さらに 2015 年の研究大会において「gender equality(男女共同参画)の理念と現状」というテーマで WS を開催し、提題者として藤江陽子氏(文部科学省幹部)および中島千鶴氏(ロンドンメトロポリタン大学教授)を招聘した。男女共同参画(gender equality)の理念を支

える「平等性 (equality)」概念を多様な論点から再検討することによって、男女共同参画に関する哲学的議論を深化させる契機となった。2013～2015年のWSの諸成果は、『理想』(695号 2015年)の男女共同参画特集号に掲載されており、哲学界における議論の一層の進展が着実に蓄積されている。

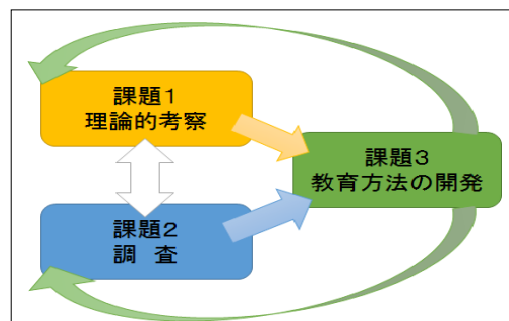
このように日本哲学会では、男女共同参画の理念と哲学、そして若手研究者育成を巡る諸問題を相互に連動させながら議論を深める諸活動を展開している。諸状況を少しでも健全な善き方向へと転換するためには、諸活動の一層の充実と関連する各方面との有機的連携が求められる。

2. 研究の目的

本研究は、日本哲学会男女共同参画・若手研究者支援ワーキンググループ(以下、WG)のメンバーが中心となり、哲学・思想分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する哲学的・理論的な整備を行うと同時に、それを強力に推進する方法を開発することを目的としたものである。日本哲学会は2012年に上記WGを設立し、男女共同参画を哲学的に基礎づけると同時に女性研究者を育成する課題をはじめ、人文科学教育に大きな変革と国際化が迫られる中、新しい教養としての哲学思想の役割を自覚した若手研究者をどのように養成するかという問題に取り組むことを開始した。本研究はそれをより強力に発展させ、人文社会科学における男女共同参画・若手研究者育成の一つの礎となるような、哲学的に妥当かつ有効な方法論を開発することを目指した。

3. 研究の方法

課題1.男女共同参画と哲学思想の社会的意義についての理論的考察、2.男女共同参画とキャリア形成に関する調査、3.若手育成のための新しい教育方法の開発の三つの課題をグループに分けて担当し、図のようなフィードバックを通じて進める。課題1は、学会でのWSや論文発表などを通して練り上げ、課題2は統計調査とインタビューを専門の調査者を入れて進める。課題3は、1と2の理論とデータを基にWS、講演会、研修会を通じて実行し、2と3にフィードバックする。



4. 研究成果

2016年5月 日本哲学会第75回大会(京都大学) <WG主催WS>

「哲学と導入教育 哲学教育の質的向上を目指して」

(『哲学』68号に報告文)

2016年10月 「ポジティブ・アクションの根拠とは? 男女共同参画への哲学・倫理学からのアプローチ」 <WG主催WS>(明治大学)(発表内容は学術論文として既刊)

2016年10月 東北哲学会第66回大会(東北大学) <共催WS>

「哲学を教えること」(『東北哲学会年報』33号に内容収録)

2016年12月 西日本哲学会第67回大会(熊本学園大学) <共催WS>

「学会で哲学するということ」(2019年3月刊行報告書に内容収録)

2017年1月 日本哲学会WG「第二回男女共同参画アンケート」実施

(2019年3月刊行研究成果報告書に分析結果収録)

2017年5月 日本哲学会第76回大会(一橋大学) <WG主催WS>

- 「どう変わる！日本哲学会」(『哲学』69号に報告文)
- 2017年6月 日本哲学会WG「全国の哲学・思想系教員に関する調査」実施
(2019年3月刊行研究成果報告書に分析結果収録)
- 2018年4月 『哲学』69号 特別企画
「ハラスメントとは何か 哲学・倫理学からのアプローチ」
- 2018年5月 日本哲学会第77回大会(神戸大学) <WG主催WS>
「査読に通る論文の書き方」(『哲学』70号に報告文)
- 2018年10月 科学哲学会第51回大会(キャンパスプラザ京都) <共催WS>
「科学哲学・分析哲学分野の若手研究者のキャリア形成を考える」
- 2018年10月 関西哲学会第71回大会(龍谷大学) <共催WS>
「哲学および人文・社会科学における男女共同参画推進・
若手研究者支援の理念、現状、そして展望」
(『アルケー』27号 内容掲載)
- 2018年12月 北海道哲学会2018年度後期研究発表会(北海道大学)
<共催WS>「ホッブズ母権論の射程
中村敏子『トマス・ホッブズの母権論』を手がかりに」
(2019年3月刊行研究成果報告書に論文掲載)
- 2019年3月 第26回広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター例会
<共催WS>「ジェンダーと応用倫理」(広大紀要に論文掲載)

5. 主な発表論文等

2018年度のみ

[雑誌論文](計 24 件)

1. 飯田隆「男女共同参画と哲学」,『哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究』2019年3月,所収,1-12頁(招待論文)
2. 和泉ちえ「コスモスとイソノミア 「等しくすること(isazein)」の源流を巡って」,『哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究』2019年3月,所収,13-28頁(招待論文)
3. 鈴木伸国「ポストモダニズムにおける客観性と平等 S・ハーディングの知識社会学から」,『哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究』2019年3月,所収,29-38頁(招待論文)
4. 森一郎「近代平等主義の起源へ ワークショップ「ホッブズ母権論の射程」を振り返って」,『哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究』2019年3月,所収,81-90頁(招待論文)
5. 秋葉剛史「日本哲学会2016年男女共同参画アンケート集計報告」,『哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究』2019年3月,所収,91-124頁(招待論文)
6. 秋葉剛史/笠木雅史/菅原裕輝「全国の哲学・思想系教員に関する調査の報告」,『哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究』2019年3月,所収,125-146頁(招待論文)
7. イギリス哲学会・イギリス哲学分野の女性のための協会/笠木雅史(訳)「イギリスの哲学分野における女性」,『哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究』2019年3月,所収,147-188頁(招待論文)
8. 村上祐子「若手哲学者支援・男女共同参画の仕掛けづくり 海外事例を通して」,『哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究』2019年3月,所収,189-195頁(招待論文)

9. 小島優子他「哲学分野における女性共同参画と若手研究者支援 四国5大学連携女性研究者活躍推進シンポジウム・ポスター発表」,『哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究』2019年3月,所収,196-198頁(招待論文)
10. 吉原雅子「西日本哲学会・九州大学の現状についての報告」,『哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究』2019年3月,所収,199-208頁(招待論文)
11. 加藤泰史「哲学および人文学・社会科学における男女共同参画推進・若手研究者支援の理念,現状,そして展望 日本哲学会の事例紹介」,『哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究』2019年3月,所収,219-234頁(招待論文)
12. 河野哲也「関西哲学会第71回大会におけるワークショップの報告」,『哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究』2019年3月,所収,235-238頁(招待論文)
13. 和泉ちえ「プラトン『国家』第5巻のジェンダー平等思想 人間のフュシスの発見」,日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第67号,2019年3月,所収,69-77頁(招待論文)
14. 鈴木伸国「ケアとエクササイズ 生き方としての哲学と精神修養の伝統から」,『グリーンケア』上智大学グリーンケア研究所,2019年3月,所収,3-14頁(招待論文)
15. 小島優子「ジェンダーの公正さについて」『ぷらくしす』広島大学,2019年3月,87-96頁(招待論文)
16. 大河内泰樹「多元的存在論の体系 ノン・スタンダード存在論としてのヘーゲル『エンチュクロペディ』」,『思想』第1137号,2019年1月,所収,6-20頁(招待論文)
17. 小手川正二郎「難民の倫理学 見ず知らずの難民に責任を負うべきなのか」,情報文化研究会編『情報文化論』第13号,2018年12月,所収,26-41頁(招待論文)
18. 大河内泰樹「生命における概念と規範 観念論の範型としての生命認識」,『ハイデガー・フォーラム』第12号,2018年8月,所収,95-107頁(招待論文)
19. Yu Izumi, Masashi Kasaki, Yan Zhou, Sobei H. Oda, "Definite Descriptions and the Alleged East-West Variation in Judgments about Reference," in: *Philosophical Studies* 175 (5), pp. 1183-1205, 2018 (招待論文)
20. 笠木雅史「機械・ロボットに対する信頼」,小山虎編『信頼を考える リヴァイアサンから人工知能へ』勁草書房,2018年7月,所収,230-252頁(招待論文)
21. 加藤泰史「ビルンバッハーの功利主義とドイツの生命・環境倫理学 監訳者あとがきに代えて」,ディーター・ビルンバッハー『生命倫理学 自然と利害関心の間』加藤泰史・高畑祐人・中澤武監訳,法政大学出版局,2018年6月,所収,499-511頁(招待論文)
22. 池田喬「ただの言葉がなぜ傷つけるのか ハラスメント発言の言語行為論的探究」,『哲学』69号,2018年4月,所収,9-20頁(招待論文)
23. 和泉ちえ「ギリシア哲学の視点からハラスメント問題を考える」,『哲学』第69号,2018年4月,所収,48-52頁(招待論文)
24. 鈴木伸国「哲学・思想系学会におけるハラスメントへの対応状況」,『哲学』第69号,2018年4月,所収,44-47頁(招待論文)
25. 鈴木伸国「たましい」の分化と希薄化 人間論における「たましい」の位置」,上智人間学会編『人間学紀要』第47号,2018年4月,所収,57-74頁(招待論文)

[学会発表](計 10 件)

文字数制約のため再掲載割愛。本文書「4 .」参照。

[図書](計 6 件)

1. 和泉ちえ, 秋葉剛史, 飯田隆, 池田喬, 大河内泰樹, 笠木雅史, 加藤泰史, 河野哲也, 小島優子, 小手川正二郎, 佐藤静, 鈴木伸国, 村上祐子, 森一郎, 吉原雅子『哲学分野における男女共同参画と若手研究者育成に関する理論・実践的研究』文成印刷,2019年3月,1-250

頁

2. 森一郎『ハイデガーと哲学の可能性 世界・時間・政治』法政大学出版局, 2018年8月, 1-431頁
3. マルティン・ハイデガー『技術とは何だろうか 三つの講演』森一郎編訳, 講談社学術文庫, 2019年3月, 1-171頁
4. デボラ・ヘルマン『差別はいつ悪質になるのか』池田喬・堀田義太郎訳, 法政大学出版会, 2018年7月, 1-318頁
5. 河野哲也『じぶんで考え じぶんで話せる こどもを育てる哲学レッスン』河出書房新社, 2018年6月, 1-256頁
6. 池田喬「自立と依存 哲学的考察の行方」, 池田喬・垣内景子・合田正人・坂本邦暢・志野好伸編『いま, 哲学が始まる。 明大文学部からの挑戦』明治大学出版会, 2018年5月, 所収, 171-199頁

(1)研究分担者

- 森 一郎 Mori Ichiro 東北大学, 情報科学研究科, 教授 (00230061)
飯田 隆 Iida Takashi 日本大学, 文理学部, 教授 (10117327)
小手川 正二郎 Kotegawa Shojiro 國學院大學, 文学部, 准教授 (30728142)
秋葉 剛史 Akiba Takeshi 千葉大学, 大学院人文科学研究院, 准教授 (30756276)
河野 哲也 Kono Tetsuya 立教大学, 文学部, 教授 (60384715)
笠木 雅史 Kasaki Masashi 名古屋大学, 教養教育院, 特任准教授 (60713576)
池田 喬 Ikeda Takashi 明治大学, 文学部, 専任准教授 (70588839)
鈴木 伸国 Suzuki Nobukuni 上智大学, 文学部, 准教授 (70612084)
村上 祐子 Murakami Yuko 立教大学, 理学部, 特任教授 (80435502)
大河内 泰樹 Okochi Taijyu 一橋大学, 大学院社会学研究科, 教授 (80513374)
佐藤 静 Sato Sayaka 大阪樟蔭女子大学, 学芸学部, 准教授 (80758574)
加藤 泰史 Kato Yasushi 一橋大学, 大学院社会学研究科, 教授 (90183780)
吉原 雅子 Yosiwara Masako 九州大学, 人文科学研究院, 准教授 (90323865)
小島 優子 Kojima Yuko 高知大学, 教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門, 准教授 (90748576)

(2)研究協力者

- 金澤修 Kanazawa Osamu 東京学芸大学, 教育学部, 研究員 (60524296)
筒井 晴香 Tsutsui Haruka 玉川大学, 教育学部, 非常勤講師 (90760489)
菅原 裕輝 Sugawara Yuki 京都大学 非常勤講師 (90768590)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。